



北海道大学グローバルCOEプログラム

📍 ライブ・イン・ボーダースタディーズ

No. 6 2011年3月25日

特集「ヒルマン元監督の体験的スポーツ国境学」

北海道大学グローバルCOEプログラム
境界研究の拠点形成

特別セミナー

体験的スポーツ国境学

ヒルマン元監督の日米野球ウォッチ!

**入場無料
同時通訳付
200名限定**

事前申込が必要です
<http://borderstudies.jp>

講師
北海道日本ハムファイターズ元監督
トレイ・ヒルマン氏

日時
2010年**12月18日土**
13:00~14:30 [開場 12:30]

会場
北海道大学理学部5号館
大講堂(2階)

※駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。

聴講申込先 ホームページからお申し込みください
北海道大学スラブ研究センター「境界研究の拠点形成」
<http://borderstudies.jp>

【主催】北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」
【共催】北海道大学スラブ研究センター



ヒルマン講演会の実現にあたって

本特集は、2010年12月18日、北海道大学において開催されたヒルマン元日本ハムファイターズ監督の講演会「体験的スポーツ国境学-ヒルマン元監督の日米野球ウォッチ」の様相を収めたものです。

鹿児島、宮崎とフランチャイズのない野球不毛の地で、テレビのジャイアンツ・ファン一色に囲まれて幼少時を過ごした私は、フランチャイズで野球をみることにあこがれていました。しかし、私が入学した頃の福岡に、すでに西鉄ライオンズはなく、やがて待ちこがれたフランチャイズにダイエー・ホークスが移転しますが、私は山口の大学へと赴任します。やがて、北大に赴任すると、追いかけるかのようにファイターズが札幌に移転、ついにフランチャイズ球団を応援する機会がやってきました。移転から優勝まで10年かかったホークスの経験から当分はだめだろうと思いきや、僅か3年で優勝。2006年、日本一の胴上げを私は内野一列目の席でみるという幸運を得ました。なによりも、自分の人生のなかでフランチャイズ球団の日本一の瞬間を目の前でみるなどと夢想だにしていませんでした。私はこのときヒルマンさんに心を奪われました。

2007年秋から2008年まで、私は、ワシントンのブルッキングス研究所にいました。その後、ヒルマンさんがロイヤルズ監督に赴任されるとのニュースをきき、これは会いにいかねばと決意しました。

2008年4月、このような思いを手紙にしたためたところ、なんとすぐに自宅に電話をいただきました。5月9日、ヒルマンさんにカンザスシティの球場でお会いしたとき、ロイヤルズは快進撃を続けていました。

その時からヒルマンさんを是非、札幌にお呼びして、彼のベースボールについての考え方をお聴きしたいと考えておりました。私たちがかかわるボーダースタディーズは、文化や風俗などの研究も重要なテーマであり、スポーツもまたとりあげるべき対象のひとつです。米国と日本でそれぞれベースボールと野球の監督をし、また北海道という地で活躍されたヒルマンさんの存在はまさに私たちのプロジェクトで招待するにふさわしいと確信します。

なお、今回の招請につき、ご尽力いただいたHBC北海道放送の高橋新一さん、クレストプロモーションの池田英樹さんには心よりお礼申し上げます。また何よりも、ノーギャランティで今回の講演をお引き受けくださった、ヒルマン監督に心よりお礼申し上げます。この講演録を読まれた一人でも多くの方が、スポーツとボーダーについて考える契機になれば嬉しく思います。 (拠点リーダー 岩下明裕)



(トレイ・ヒルマン) 皆さんありがとうございます。本当に北大に来られたこと、北海道に戻ってこられたことを私は非常にうれしく思っております。家族の者も日本に本当は来たかったのですが、今回は私1人で来ました。北大の関係者の皆様にこのようなイベント、そしてこのようなトークショーの機会を与えてくださいましたことを感謝したいと思います。皆さんにも感謝したいと思います。

今日の私の話は、日米の野球の違いです。多くの違いがあります。日本プロ野球とアメリカ・メジャーリーグの選手の違い、そして球場でどのような野球を展開しているのかの違いについてです。

メンタル面

最初にメンタル面での違いを挙げたいと思います。日本の選手から始めたいと思いますが、これは私の個人的な意見だということをご理解ください。5年間日本で監督をしたときの経験に基づいて述べています。私の意見は必ずしもいつも正解だということではありません。

私から見て日本の選手がアメリカの選手と比べて違う点は、まずフィールドに出ると長時間、活動をするという姿勢が見られます。長時間、バッティングの練習、守備の練習、そして個人的な守りの練習とか、そういったことにすごく長い時間を費やします。これは本当に強いメンタルがないとできないことだと思います。

日本で『武士道』という本を読んだことがあります。この本から日本の文化を解釈することができました。日本の選手が文化的にどのように考えるのか。そして文化的にみて、どのように彼らにとって正しいことをするのか。社会的、そしてプロの選手としてどのように彼らが活動するのか。日本の選手は特に目上の人を尊敬することがまず第一に挙げられます。彼らは言われたことをそのまま受け入れる、ボスに言われたこと、監督がもし選手に対してこうなさいと言ったら、選手は疑いもなくそうします。時々、私は、選手から質問があるかなと思うんですが、監督を尊重するあまり、彼らは質問しません。

次に身体面ですが、公式練習の際、日本の選手は監督から出るサインを見て、それに従うよう訓練されています。またヘッドコーチのサインをよく見えています。これはアメリカでどのように違うのか後で言いますが、ファイターズでどのように私がやってきたかも後でお話しします。サインを見て二塁から選手が走るときに、就任一年目、東京で私が驚いたことは、遊撃手、二塁手がサインなしに行動してしまうことに私がOKを出したことに、日本のコーチたちが驚いたことです。



1年目でそのような驚きがあったので、日本人のコーチに、じゃあ、もう少しオープンに考えてみようかということをご提案しました。選手に対して自分で状況を判断して行動しなさいと言ったんです。このことは選手たちにとっても初めてのことであったんです。二塁手が自分で考え、そしてそれを行動に移していくこと。これは文化的な基盤、素地が大きく違っていけば当然やりにくいわけですね。それが今、やってもいいということなので、じゃあ、自分の裁量の中でやろうと。自分で考える、自分の能力を考えることも養っていこうと、選手たちがだんだんそういう方向にいました。で、実際それができるんですね、優秀ですから。このことを見ていると、ずいぶんアメリカとは違うなという感を持ちました。アメリカの選手はまったく異なる哲学を持っています。



トレーニング日について

日本の選手には予め決められたタイム・スケジュールがありません。特に春季キャンプは日数も長く、逆にアメリカでは日数も短い。

日本の選手についていえば、やはり上から言われたからというだけではなくて、上の者に対する信頼感が大変強いということ。コーチは一生懸命やりますし、選手がもっとやる気になれば、コーチもそれに付き合っって時間を延ばして一緒に選手たちと追加トレーニングをこなしていくという姿勢があります。



これは果たして生産的なのだろうか。文化から見ていくと日本の選手は、多大な時間・エネルギーを使い過ぎではないだろうか。そしてその結果、故障が出てくるのではないだろうか。自分自身に肉体的に多くを課し過ぎないだろうか。日本人選手はそういう傾向がないだろうか。そういった日本のファイティング・スピリッツがうまく働かなくなってくることがないのだろうか。

もう1つ例を挙げて日本の選手のメンタリティーの強さを説明します。日本では年間144試合ありますね。移動は全て公共の交通機関を使います。関東や関西、九州で試合があるときには、一般人と同じように飛行機や電車を使っていきます。空港に行って、それから搭乗券が出てくるまで待って、搭乗ロビーに入ってそこで時間を少しつぶして黙って待って、そして飛行機に乗ってほかの一般客と一緒に移動する。これがアメリカと大きく違うところです。

日本人はおそらくアメリカよりも尊敬のレベルが高いのではと思うんですね。つまり日本のファンはあまりに過激な動きを選手に対してしないのではないのでしょうか。もしファンがそういった行動を取るような場合、選手にとっては大変なストレスになります。また、場合によっては移動日の夜に試合をしなきゃいけない。自分の能力を最大限発揮できるまで持って行って、そしてお客さんに喜んでもらって勝つ試合をしなければならない。これは大変なストレスです。

同じ点についてアメリカの選手のメンタリティーを見てみましょう。まずアメリカの場合、実際に動いている時間がすごく短い。そしてもっと集中して一気にやってしまう、あるいは時間がより短く集中力は同等かそれ以下、というところが、アメリカの選手の傾向としてあります。

チームプレーのパフォーマンスを、効率性というところから見えていくと、目に見えるもの、そしてはっきりと説明がつくもの、適切にやっているかどうかわかるもの、というのがいいわけです。

それに対して日本では、20回やってみて、良いから、じゃあ、あと20回同じようなプログラムをやろう、というやり方がありますね。これはアメリカでは、いいと分かりますと、じゃあ、次回は減らそうと。つまり集中力が持続する中で効果のあるトレーニングをやろうということで、回数や時間は後から付いてくるんです。

実際、春季トレーニングのトレーニング時間、これはアメリカではどんどん短くなっています。日本では皆さんご存じだと思いますけれどもすごく長いですよ。朝9時から夜7時までやっていますね。日本での1年目のとき、バッティングコーチが夕食後の夜8時から10時まで屋内で打撃の練習をしたい、いいですかと聞いてきたときには本当にびっくりしました。朝からずっと昼、夜とフィールドで10時間ぐらい練習をしたいと言ってくるんですね。これは本当に驚いてしまいます。



アメリカの選手側からいってみると、やはり目上に対する尊敬の念が日本とは明らかに大きく違います。私の経験を踏まえていうと、アメリカにはそういった尊敬の念というのはありません。日本の選手は上から言われたことをきちっとやりますね、リーダーが何を指示しようが従うわけです。アメリカの選手はほとんどの場合、高給取りのメジャーレベルにおいても、監督が言ったことについては、応じますが質問が付きものです。トレーニング時、アメリカ人の選手はまず状況判断が第一に来て、理由を問うてきます。監督から指示があった場合は、なぜかということは何度も納得するまで聞いてきます。目上に対する尊敬の念がない場合、「なぜ」と説いてきます。「なぜ」は、しばしば言われた指示に同意しないことを意味することもあります。ですから、そういったことでアメリカの選手をマネージすることが難しくなってきます。アメリカでの監督業は難しいということになるわけです。場合によっては、じゃあ、「それは後で話そう」と。また頭の中に年俸、数字のことがあって色々聞いてくるということもあるわけだし、ほかにも何か考えるところがある場合は、練習のやり方について監督の意志を汲んですることがだんだんやりにくくなることもあります。

先ほども話しましたがけれども、若いときから、自らの一連の役割をはっきりさせるトレーニングをします。例えば、二塁に走者がいてリードが大きい場合、我々は二塁手、遊撃手にお互いで素早くピックオフサインを出せる能力を期待します。

私は1年目に日本のコーチから「そういうやり方は日本ではありません」と言われました。そう言われたので、私は日本のコーチに「じゃあ、もう少し広く考えましょうよ」と。そして私たちは選手に新たなトレーニングを与えて、そしてアメリカの考え方を日本のゲームで活かしてみよう、と。そして金子誠と田中賢介に話してみると、2人とももし、ダッグアウトからは見えにくい角度で、自分達が内野で何か気付いたなら、自分達でピックオフプレーをするのは好みに合うと言ってくれたんです。しばらく時間はかかりましたが、広い視野に立つ日本のコーチ、特にアメリカでヤンキースのコーチの経験をされていた白井一幸さんのおかげでうまくいきました。白井さんは、ファイターズにいる日本人選手には理解力があり、この考え方をファイターズというチームで実践できることを分かってました。

アメリカ流状況判断のもう一例を挙げます。マウンドにいる相手チームのピッチャーは強敵で、打席のバッターはこれまでほとんど打てていないとします。状況的には、塁上の走者を次の塁に進めさせるやりかたを取るんですね。ただ、攻撃面での状況判断だと、三塁手の位置を見て、近ければセーフティーバントをせず、下がってれば、セーフティーバントの好機、と。私たちは打者に、強攻するかどうか考えさせる選択肢を持たせ、サインなしに独自にセーフティーバント



で走者を次の塁に進めるというやり方もするようになりました。

次に盗塁ですけれども、アメリカではとにかく走れ、メンタル的に常に走れと奨励する訳です。我々が走者をコーチ並みに信頼する場合、グリーンライト(青信号)を与え、自分で判断してサインなしに盗塁をやると。ただ、盗塁してほしくない状況があるわけですね。そのときは三塁ベースコーチは「待て」というサインを送るんです。それ以外、盗塁は自由です。

これらの例は状況判断のための精神の自己管理です。文化的にも異なります。アメリカ人の選手であれば、もっと自由な思考で、個々の力をどのように発揮すれば相手をやっつけられるかということを考えます。ただ、コーチや監督よりも自分が優れていると思って何でも決めてしまうことになる、これは大きい問題となっていきます。

身体面

次のテーマは身体的構造、どのように体を鍛えて試合に臨むのかという点です。日本人選手の方がずっと柔軟性があります。全体的な機敏性も日本人の方が上です。足の柔軟性、腰まわり、かかとの柔軟性は球が低く来たら左右にすぐ動けるようにしておくために重要です。なぜ日本人の方が秀でているかと言うと簡単で、ストレッチングを一生懸命やっているからです。おそらく若い頃から日常的にやっているのでしょう。日本に来て私がびっくりしたのは、日本の人々は皆、踵を地面に付けて、しゃがみそして臀部を足に付けることができる。ふらふらしなくてもそれができるのは日本人ですね。アメリカ人はなかなかできません。もはやできませんが、私もかつて練習することで監督就任 3 年目までにそのようなしゃがみ方ができるようになりました。

札幌ドームのホームゲームでは体調管理チェックをします。試合が 6 時開始の場合は 3 時ぐらいにチェックします。選手は 1 時 45 分から 2 時ぐらいには来て、個々人のストレッチングをやっています。チェックの前までに最低でも 45 分、最長で 2 時間は行っています。

アメリカは選手がストレッチングをするのは 10-15 分しかなく、試合に相応しい体のコンディション作りのためには不十分です。

日本の選手では特に守備のとき、高い運動能力を発揮し、爆発的に動けます。そして左、右に行動範囲が広く、そして送球の正確性も日本の方が高くなります。外野手が打球を追うとき、捕球から送球までより早く、より強く長い返球ができます。

アメリカの選手は攻撃面を重視し盗塁を仕掛けますが、日本の選手はチームプレーの観点から攻守を全体的に考慮し、守備面から進塁阻止を確実にしようとします。



次にトレーニングですが、アメリカの選手の場合、攻守両面で強さとパワーを付けることを優先します。もっと日本のトレーニングの仕方をアメリカにも導入したいと思うぐらいなんですけれども。投球に関しては、かなりの割合、アメリカの投手はよりハードな投球します。アメリカの投手の方が力押し、パワーで勝負をしてきます。

攻撃面では、アメリカの打者は、インパクトの瞬間、より強く叩き、そしてより遠くに飛ばすようにします。ですから打球は狙った場所には正確に飛びません。アメリカの選手は皆、パワーを付けてバッティングをしたいという思考があります。そのような結果を求めてアメリカの選手は、特にシーズンオフにウェイト・トレーニングにします。

日本で的一年目、私は、日本の選手にこのようなことを理解してもらうため、オフシーズン中にウェイト・トレーニング室に入ることで強さを得て、そして球場グラウンドではトレーニング室で得た強さを失ってしまうことを理解させようと思いました。2.5 か月から 3 か月の間、ウェイトリフティングのみのトレーニングをするように、ストレッチングも合わせて、そしてアジリティー(機敏)のトレーニングもしてもいいけれども、でも春季キャンプの2~3週間前までは野球の動作はしないよう奨励しました。

『武士道』、ファイティングスピリットからは、ウェイトトレーニング・ルームに行って、そして1週間ちょっとそこでトレーニングをし、そして球場に戻る必要があると感じるのですね。ボールを投げたり、拾ったり、フライを受けたり、バッティングの練習をしたり、日本の選手はそういう野球の練習をしたがるんですね。私は強さを得るためには良くないと思うのです。

アメリカの選手は、本当に球場外でトレーニングをするのを楽しみます。心身ともに、次のシーズンには一層強くなっていることを理解しています。ですから、オフシーズン中、筋力を鍛えるウェイトトレーニングのプログラムが重要になってきます。シーズン中は、オフに身につけた身体的能力を維持します。

日本の場合は、シーズン中・オフともに常にメンテナンス・プログラムです。そしていろいろな、守備やバッティングの実際の技術に関心があります。パワーを付けることは余りにしません。これらの違いは、文化面から来る気がします。

ファン

次はファンの皆さんのことです。日米のファンの反応には大きな違いがあります。我々から見て日本のファンはとてとても親しみやすい。日本のファンの皆さんは非常に尊敬すべき存在です。そして野球選手、コーチ、監督に対してもそのような尊敬の念を示してくれます。



私はいつも日本の球場が清掃員を雇う必要があるのか、不思議に思っています。日本の文化は清潔好きで、自分のゴミは自分で片づける。アメリカではスタジアムの中でごみ箱状態になって、清掃員が片付けてくれるのだからとゴミがあちこちに捨てられます。カンザスシティ・ロイヤルズでの1年目、2008年のことでしたが、テキサスで試合をしていました。これは私の出身地です。風がとても強い日でした。多くのファンがホットドッグを食べていてその紙が風に吹かれてグラウンドまで来てしまいました。75-100のホットドッグの紙、包装紙がグラウンドの方に流れてきました。私はちょっと恥ずかしい思いをしました。失礼なお客さんだと。日本ではこんなことはまずあり得ないと思いました。日本でこのようなことがあったら試合を中止して、係員が取り除きに来ると思います。ですから5年間日本で野球ができたことは、私は非常に感謝しています。

ファンのチームへの忠誠心、情熱は日米同じだと思います。その応援の仕方は同じではありません。アメリカでは日本に比べますとほとんど組織化されていません、ファンは自由にリラックスをして、言いたいことを言う習慣があります。ファンの間でも、そしてスタンドから、選手、監督、コーチにも嫌なことを、不満をぶつけてしまうことがあります。

私がカンザスシティの監督をしているときに、私の任期中も含めて何年も勝率が低迷している状況でホームのファンが非常にいらいらしており、特に私の就任一年目の時、「おい、ヒルマン、日本に戻れ」とやじを飛ばすんです。かなりの緊張状態を引き起こしますが、でも、何度も聞くうちに「それは悪い考えではない」と思い始めました。そのようなやじは日本に行ったらないし、仮に言われたとしても私は日本語のヤジを理解できない。

戦略

試合内の戦略的な手法にも違いがあります。皆さんも知っているように、どちらかがよくてどちらかが悪いということではなく、両国の哲学を組み合わせた形があり得ると思います。日本ではスモールボールといって、一步一步進むということが重宝されます。アメリカの場合は一度にマルチに進む、二塁打、本塁打をファンが望んでいます。

日本のファンは、アメリカのファンがホームランを評価するのと同じくらい、犠打を高く評価します。チームプレーの観点から見ると、日本の場合はまず最初の出塁から1点目を上げるのがとにかく重要です。アメリカでは、最初のランナーがホームに還れないからといって勝てないということではないのですけれども、日本の試合の場合はそのことを気にし過ぎかもしれません。一点目を取らないと雰囲気がちよっと悪くなるということに気がきました。早い回から意気消沈することはないのと思うのですが。



アメリカでの試合では、特に投球ですが、打者にガンガン立ち向かい早いカウントからストライクで攻めることが推奨されます。一方日本の試合では、打者にストライクと思わせるような投球が大事です。だから打者は振りますがヒットにはならない。アメリカでは、恐れずに、その打者のどこに投げれば一番打たれないかというスコアラーの情報に拠り、コースに良い球を投げ込むよう教え込みます。

日米の大きな違いについてもう 1 つ申し上げたいのは、1 軍登録メンバーについてです。日本の試合は長いですね。アメリカでは 5 回終了後のハーフタイムがありません。実は、自分の娘もファイターズガールと一緒に踊っていたので、私はハーフタイムを見るのが楽しみでした。

アメリカではコミッショナー事務局が常に「試合は早く」「スピードアップ」と言い続けており、平均試合時間は 2 時間 40 分から 3 時間の間までとなっています。日本ではだいたい 3 時間 20-30 分ぐらい、あるいは 4 時間ぐらいですかね。おそらくアメリカ人はその長さでは耐えられず「早くやれ」「どんどん進め」と野次ります。これは大きな違いですね。監督として日本でやっていたときに、西洋のものを体に入れてきていますので、このあたりに寛容ではなく試合運びを早くしたかったのですが、すぐに日本では早く運ぼうと思ってもできない、ということに気付きました。

チーム間の選手の移動ですが、アメリカでは 10 年ぐらい前に比べると非常に一般的になりました。日本ハムで監督をはじめた 8 年前、トレードはそれほど一般的ではなかった。今は少しですが、トレードは一般的になってきました。ご存知の通り、ファイターズは、相手先と一致すれば、非常に積極的にトレードを行っています。

アメリカでは、FA 期間が短く、お気に入りの選手を留めておくことが難しくなっています。FA 資格を得て、そしてトレードを恐れないのであれば、選手は頻繁にチーム間を移動します。

日本プロ野球は 12 チーム、メジャーは 30 チームあります。ですから、アメリカでは戦力やお気に入りの選手をチームにとどめておくのが難しくなっています。応援するチームを実際に調べると、戦力が余所のチームから移籍してきたことが分かります。アメリカではトレードが多く、色々な選手があちこちからやってくる中で、特定のチームのファンであり続けなければなりません。

それから 1 軍登録メンバーですが、アメリカは 25 人、日本は 28 名と本当に大きな違いがあります。28 名だと試合時間を長くすることができます。日本ではブルペンに控えの投手をさらに 2 人揃えられ、さらにベンチに 1、2 人余計に置いて相手監督の投手起用に対処することができます。アメリカではより少ない戦力で慎重に用兵を行う必要があります。

最後に年俸についてですが、もちろんマイナーからメジャーまでは長い階段があります。メ



ジャー選手の最低年俸額は現在 42 万ドルです。そこから年俸が増えていく訳ですから、額もずっと大きくなる。アメリカでは 1200-1500 万ドルクラスの高年俸の選手はそう珍しくない。日本人選手に日本プロ野球ではこの額はありえない。経済も違うしテレビ放映権収入も違う。試合数、スケジュールも違う。日本では 144 試合を約 180 日間でやる。一方アメリカは 181 日間に 162 試合をする。つまり試合数が非常に多くスケジュールも厳しいが、専用チャーター機を使って選手を移動させるので移動は楽です。私は日本の方が好きですが、それはこれは試合数が日本の方が少ないので、スケジュールが楽だということだけではなくて、体、身体のいい状態を維持することと同時に、ファンとの交流も時間が割けることになります。また先ほど言ったテレビ放映権ですが、これは非常に大きいですね。今、162 試合、1 シーズンにありますけれども、テレビ放映権で球団への収入を確保しようというのであれば、試合数が下がることはありません。

最後に皆さん方からご質問をお受けするつもりですが、その前に一言だけ申し上げたいと思います。日米両方で仕事をした経験から申しますけれども、双方に良い点があると。100%こっちが良い、100%こっちが悪いということは決してありません。要するに自分の考え方、基本的な物の考え方、価値観をしっかりと常に持ち続けながら、自分のスタッフや関係者たちと話をして物事を決めていく。コーチ陣に対してもこういうことは言っちゃいけないのかなと思わせないようにする、もっとオープンにいろいろなことを話してもらうようにする。

同時に、コーチ陣から私が学んだこともたくさんあります。良いコミュニケーションを双方で取るように努力すること。そして双方の良いところ、日米の良いところを融合させていけば、非常にいいことではないかと思います。では皆さん、ご清聴、ありがとうございました。ご質問をお受けしたいと思います。(拍手)

質疑

(司会) ヒルマン監督ありがとうございました。時間が押しておりますので、私からまず 1、2 点質問をしてお答えいただき、その後皆さんの質問をお受けしたいと思います。

私がヒルマン監督にお伺いしたいのは、ロイヤルズ時代のことです。ヒルマン監督の試合を 4～6 月ぐらいまで見させていただいたときに、非常に日本の影響を受けていて、バントをし、あるいはピッチャーを完投させる。これはアメリカでは非常に珍しいことだと思うですね。非常に日本の野球を持って戦われて、いい成績だったと思います。当時は藪田、それから野茂がいました。日米の野球の違いを見ていて思ったのは、藪田はほとんどメジャーでは通じなかった。とこ



ろが千葉ロッテに帰ってくると、これが素晴らしく抑えて、藪田を今シーズン打っていたらファイターズは優勝していたのでは思うくらいに抑え込まれました

(注: 2010年シーズンの藪田の対日本ハム防御率は0.87)。藪田を見ていると、やっぱりメジャーリーグと日本プロ野球とは差があるだろうかと考えてしまいます。

そこで質問ですが、日本の野球を学んで、それでメジャーで戦われていたと思いますが、結局、残念ながらロイヤルズは最後の方はあまり勝てなかった。それはいったいどういうことだったのか。ちょっと厳しい質問ですがよろしくお願いします。



(ヒルマン) まず最初のご質問。藪田がなぜアメリカではあのような結果になったのかということですが、その大きな理由は、自信をもってストライクを投げられなくなったんじゃないかと思います。アメリカではさっきから言っていますけど、試合ではパワーがモノを言います。投手が失敗を冒すとその後のインパクトも大きい。そしていったん投手が失敗すると打者が出塁してしまい、そしてまた次のバッターが打ち、どんどんと得点圏に行ってしまうということになってしまふ。

第二の理由ですが、アメリカの野球はより流動的です。日本ではいつも自分のポジションが決まっています。その役割をそれぞれがきちんと担っていくという非常にまとまったチームづくり、試合運びがあります。このことを藪田には何度も話しました。藪田は、このことが問題で打たれている訳ではない、と言ってくれました。藪田はファイティングスピリットを常に持っていたので、そのことを言い訳にしたくなかったのだと思います。



実は私は藪田を推薦し、藪田を連れていこうと思ったんです。自信さえより強く持っていれば、もっといい成果につながったのではないかと思います。



次にロイヤルズでの成績が良くなかった点ですが、率直に言って、選手に依存します。監督の立場から戦略的には、ある程度の試合の結果を見ていて、この人材レベルではこのやり方でいこうと監督が決めてやっていきます。私がロイヤルズの監督になったとき、5年から6年かかる大きな挑戦であることに気付きました。ロイヤルズのオーナーの投資はア・リーグ中部地区の他チームに比べ十分ではなく、選手たちの年俸も相当に低く、自分達のマイナーから選手が成長するのを待たなければなりませんでした。2012年、2013年頃にはロイヤルズはすごく競争力あるチームになってくると思います。

ただ、球団ビジネスという側面からいけば、短期的な目標もクリアしなければならないですから、自分の解任については十分私は納得しているところです。

(司会) ありがとうございました。来季はドジャースでベンチコーチということですが、ドジャースでは今回のロイヤルズの経験をどのように生かしてやれる、あるいは手応えみたいなものを考えておられますか。

(ヒルマン) ドジャースは、非常にいいフランチャイズを持っていますし、またカンザスシティ・ロイヤルズよりも資金があるので、競争力もあるチームと確信できます。ヘッドコーチ(ベンチコーチ)としてですが、これは奉仕する仕事です。私には監督経験がありますので、監督がどのようにアシストしてほしいかがよく分かっています。簡単な仕事ではありませんが、私とドン・



マッティングリー監督とはいい関係にあります。ドニーは非常に謙虚で賢い監督です。情熱を持っていて、私と多くの共通点があります。ですから私は監督と一緒に仕事をできることを光栄に思いますし、私からもいいアドバイスを与えられると思います。

(司会) では、あまり時間がないので1つ、2つ、質問をお受けしたいと思います。

(質問) ヒルマンさんが大切にされていること、第一に神、第二に家族、第三にオキュペーション。そのオキュペーションの意味を教えてくださいませんか。

(ヒルマン) オキュペーション(仕事)は家族を養うために必要です。それが単純な答えですが、もっと深い答えがあります。野球が大好きというのは、野球と人生は類似しています。人生はカーブをあなたに投げ込むかもしれませんが、あんまり高くも低くても打てない。これは野球と共通ですね。私は家族にも支えられています。銃を突き付けられて家族か野球かと言われたら、当然家族を選択します。野球も大好きですけども、家族の方がずっと大切です。

(Q) 私から質問したいのはダルビッシュのことです。彼はメジャーに行っても通用しますか。

(ヒルマン) ダルビッシュ有が大成功するチャンスがあると思います。成績がちょっと落ち込んでも自信を持ち続ける。アメリカの野球の仕組みが違うということを認識する。2004年か2005年、東京でアメリカのメディアからダルビッシュについて聞かれました。そのときも今も同じ答え方をします。今も世界で5本の指に入ると思います。私はメジャーで最上の投手を皆見えています、その上で言っています。ア・リーグでもナ・リーグの投手も見てきましたけれども、世界での5本の指に入るのがダルビッシュだと思います。成功するチャンスはとても高いです。

(司会)そろそろ時間が参りました。本日は、皆様、大雪のところ、わざわざ北大にお越しいただきありがとうございました。最後に来季のドジャースの優勝とヒルマンさんのご活躍を願って、大きな拍手で見送りたいと思います(拍手)。ヒルマンさん、どうもありがとうございました。



北海道大学グローバルCOEプログラム

📍 ライブ・イン・ボーダースタディーズ



ライブ・イン・ボーダースタディーズ No.6

特集「ヒルマン元監督の体験的スポーツ国境学」

編集者: 藤森 信吉

発行日: 2011年3月25日

発行者: 岩下明裕

発行所: 北海道大学スラブ研究センター内 GCOE 事務局

〒060-0809 札幌市北区北9条7丁目

Tel 011-706-4809 Fax 011-706-4952

URL <http://borderstudies.jp/>